

禪の友

Zen no Tomo

1

January 2019

特集

高祖降誕会



選・坊城俊樹

ひとつずつ光の宇宙茅の露

大阪府 柏原 才子

評 季題は「茅の露」、かつて川端茅舎という俳人がこれの名手と言われたが、この句もそれに劣らず巨大な宇宙観を持つ。一粒ずつの露の玉の光の中に、それぞれの宇宙が存在するという感性はみごとである。

底紅を歪め昭和の硝子戸かな

新潟県 星野 三興

評 もう古くなつた昭和のころの硝子戸。「むかし硝子」と呼ばれる硝子は何となく歪んで見える。それを通して見た底紅の色彩がなんとも美しく、昭和のそのころに時間が戻つてゆくような錯覚さえ覚える。

◆ 闇深し六地藏にはみみず蛭蚓鳴く

埼玉県 松枝勝一

◆ ひしめきて輪廻の川を鮭のぼる

神奈川県 堀田耕一

◆ 宍道湖は雲生る処秋深し

山口県 御江恭子

◆ 月涼し波打ざわに石佛

広島県 大出豊子

◆ 鷺降りて刈田の中の置物か

滋賀県 三田和子

◆ たまの芒野を一人歩いているような

栃木県 山本澄子

◆ 海と湖こ結界の大花野

愛知県 松井暁見

◆ 潮騒やはまなすの実の置き処

北海道 堺 隆

◆ 苛立ちを巧みに隠し秋扇

島根県 俵 保恵

◆ ガラス拭き窓からさがす天の川

東京都 永関和雄

選者吟

楠舞へる二千六百年の秋

俊樹

作句小見 今年の秋に村上水軍の島に行つたとき、樹齡二六〇〇年と伝わる楠木の巨木に出逢つた。それはあたかも巨大な役者がおおきな手を広げ、美しい扇とともに舞っているように見えたのである。

選・長澤 ちづ

やんちゃ降りしとやか降りを繰り返す雨
の止むのを待つのも希望

岐阜県 後藤 進

評 「やんちゃ降り」や「しとやか降り」の表現は作者の工夫だろう。悪戯も度を越してはならず「やんちゃ」で済まない豪雨もある。そんな思いを、下句で一息に「希望」につなげたところがこの歌の魅力。子育てなどにも通じそうだ。

日傘男ひがらかさなれどもしてみむと購ひし友我に
眩くらしく

鳥根県 横山 豪吾

評 この夏の暑さは命に関わる異常な暑さであった。日傘はもはや御洒落なものではない。とは言え「男が日焼けを恐れるとは軟弱な」の思いは抜けきらない。心情の伝わる一首。

◆ 己が輪すべを出る術みずすまし知らず水馬わが人生の縮図のごとしも

秋田県 小田 篤恭葉

◆ 散歩する街中にある実り田よ農婦なりしかば稲穂手に見る

静岡県 青山 清子

◆ 縫ひ針に糸つなぐとき想ひ出づ祖母に習ひしことのひとつと

鳥根県 門脇 順子

◆ 「おやすみ」がとはの別れになつたとふ厚真の兄弟未明の激震

秋田県 小松 紀子

◆ 底紅を移し替えての三年目三つ四つ咲いて秋風に揺れ

新潟県 星野 三興

◆ テレビにて大切なもの思い出と語る老女の微笑み若し

広島県 小畑 宣之

◆ 赤い実のたわわに残りヒヨドリの来ないこの秋夫はいない

山口県 濱田 道子

◆ 若き日の沈んで溜る思い出を砂金のように取れば燦めく

群馬県 川嶋 尚武

◆ 秋風に散りゆく枯葉寂しさを問う人もなし雑踏を行く

滋賀県 三田 和子

◆ 雑木林豊かなりし頃もらい湯の子と約束す明日の通草あけび狩り

三重県 西村 廣視

選者誌

骨壺を納める地下から段くだのぼり出れば茶の花その蕊しべの黄きい

ちづ

作句小見

北海道胆振地方の地震は厚真町で最大震度七を記録。未明だったため小松さんの歌の如き悲劇も起きました。ご冥福を祈ると共に一日も早い復興を願います。誰の身にも何時起こるかも知れぬ災害、毎日を大切に暮らしたいものです。



ご本山だより 大本山永平寺

【羅漢^{らかんぱい}拜^{はい}】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三二〇二



元旦の永平寺は、静けさに包まれています。永平寺では、毎月一日と十五日に「羅漢^{らかんぱい}拜^{はい}」を修行いたします。羅漢^{らかんぱい}拜^{はい}では、山門の二階にある羅漢堂に上がり、たくさんの羅漢像の前に、そのお名前をお唱えし、礼^{れい}拜^{はい}をいたします。

「羅漢」とは、仏道修行が満ち満ちている者のことです。羅漢堂の天井や壁には、大小様々な羅漢像が祀られています。羅漢堂におりますと、なんだかたくさんの仏さま方に見守られているような感じがいたします。

さて、道元^{だげん}禪師^{ぜんじ}さまはこのようなお歌を残されております。

「尋ね入る 深山の奥の さとぞもと 我
住み馴れし 都なりける」

仏を求めて、深山の中を尋ねてい

くと、辿り着いた仏の世界は、なんと我が足の裏にべったりと張り付いたこの地であり、仏も我も別物ではなかった、ということでしょう。

永平寺の修行も、足元の修行に他なりません。風呂で衣を脱いたら畳みまです。履物を脱いたら揃えます。言葉は丁寧^{ていねい}に扱います。食事の際は、どこでも「いただきます」「ごちそうさまでした」と掌を合わせます。永平寺では、生活の一息一息を修行するその身そのままが仏さまの姿なのです。

私たちは、半月に一度、羅漢^{らかんぱい}（仏）さま方のお名前をお唱えし、礼^{れい}拜^{はい}もし、我が身に仏さまを呼び、確かめるのです。竹の節の如くに何度も何度もわが身に温め、皆共に仏道を歩んでいきたいと願うものであります。



ご本山だより

大本山總持寺 【新年を祝って】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一



明けましておめでとうございます。

新春を迎え、皆さまのご多幸を

お祈りいたします。

總持寺の新年は、午前零時少し前に大梵鐘の撞き初めから始まります。

仏殿での祝祷諷經、大祖堂で江川禅

師さまご親修の元朝大祈禱が行われ、

引き続き朝まで賑やかに初詣祈禱が

続きます。

初詣祈禱は三が日間、更に七日まで

「特別大祈禱」が毎日行われ、期間中

二十万人を超える初詣客で賑わいま

す。

六日は小寒、つまり寒の入りです。

この日から修行僧は毎日鶴見の街に

出て「寒行托鉢」を行います。寒中

に大きい声を発して喉を鍛えるのは

「寒声」といって大切な行ですが、雨風の強いときはなかなか大変です。

さて、總持寺では間もなく冬安居と

称される一〇〇日間の集中修行が解

制（終了）となります。首座を中心

に冬の厳しい修行を成し遂げた修行

僧の明るい表情が、春の訪れと重なっ

て印象的です。

本年は御移転事業を成し遂げた中

興・独住第四世石川素童禪師の百回御

遠忌法要と関連する記念行持が十一

月に行われます。

また、それに併せて紫雲臺の改修

耐震工事が終了しますが、今度は向

唐門の修復工事が予定されており、し

ばらくは、境内に槌音が絶えること

はないようです。